



## 公益財団法人予防医学事業中央会・環保協

# 「研究成果発表と意見交換による技術力の共有と向上」 「第51回予防医学技術研究会議」開催

学事業中央会が主催する「予防医学技術研究会議」は、毎年2月頃に全国の33支部が持ち回りで開催しており、予防医学活動の推進という理念のもと、検査・健診・保健指導の導入や技術・指導における研究と開発を目的として実施されています。平成28年度第51回会議は、広島県支部である当協会が予防医学事業中央会とともに主催しました。2月23日・24日は、全国各支部当協会スタッフ、医療の関連業者など総勢270人が参集し、盛会のうちに終了しました。



当会理事長佐藤均の挨拶で開会(上)、グループ別の研究発表で発表する当会職員健康増進課技師 岡本沙央理(中)、同医師長 富永晃一(下)

わせて、他都府県の支部で行われる、健康増進課の笠毛郁江課長が会議の締めくくりとして「新しい健康増進事業の構築」というテーマでフォーラムディスカッションを行なうとともに、会議の進行と取りまとめを行いました。

2日間の会議を通じて、議論を行いました。問題点や今後の展望について、他都府県の支部で開催される予定です。

教育講演では、自治医科大学名譽教授・予防医学事業中央会櫻林郁之介理事長を座長とし、当協会の評議員であり広島大学大学院医歯薬保健学研究院疫学・疾患病理学教授の田中純子先生に「疾病予防と制御における健診・検診の役割について」と題してご講演をいただきました。疫学的視点からみた疾患対策について、肝炎・ウイルス検診や大腸がん検診などの成果を示すことにより、健診・検診が健康や疾病予防・制御とのように関わっているのかを、多様な統計数値から分かりやすく説明されました。2月24日の中国新聞朝刊には、「検診でがんのリスクを指摘されながら

国新聞朝刊では、大腸がん検診で「便に血が混じっている」(便潜血陽性)と判定されてすぐ鏡検査(大腸内視鏡検査)を受診した人が「便潜血陽性」と判断されてすぐ鏡検査(大腸内視鏡検査)を受診した人には、進行がんの発見率に約12倍の開きがありました。これは田中先生が講演の中でも指摘された内容であり、記事の中でも田中先生の発言として「まずは便潜血検査を毎年受けること。陽性なら痔のせいだなどと思い込み、速やかに精密検査を受けてほしい。それが自らの命を救うことにつながると記されていました。

講演でのさまざま

情報や提言は、医療事務にとつて大変有意義であり、今後に役立つ内容でした。

研究発表では、各支部から過去最高となる91題の演題が発表されました。当協会は健診技術、検査技術、健康支援、環境検査など8分野で、10題の発表を行いました。(下表参照)。

91題の取り組みについて発表した当協会の職員は、発表後の質疑などを通して他都府県の職員と率直な意見交換を行いました。受診者に安全な健診を実施するための取り組みについて、同様の事例や違う角度からのアプローチがあることを知りました。また、法律改正により新たに始まったストレッチでは、実施規

## 環保協職員の研究発表一覧

研究分野	発表内容	発表者
健診技術	受診者と看護師を守る安全・安心な採血の取り組み ー取り組み後の経過報告ー	ドック課主任技師 東浦 景子
	運転業務従事者へのPSG検査実施の報告	臨床検査課主任 中川 貴久美
環境検査	リステリア感染症予防のための遺伝子診断技術の有効性	食品衛生課技師 毛利 輝彦
	水質検査・管理におけるタブレットの活用について	環境生活センター次長 竹田 和志
メンタルヘルス	ストレスチェック実施状況と今後の課題	医局長 富永 晃一
健康支援	巡回型禁煙支援セミナーについて	健康増進課技師 岡本 沙央理
検査技術	ロックスインデックスと頸動脈エコー	臨床検査課技師 法谷 圭馬
胸部検診	低線量胸部CT検査が発見契機となった症例の報告	ドック課課長補佐 富士田 亮介
胃がん検診	受診者に安全で分かりやすい検査を実施するための取り組み	ドック課技師 桐山 あかね
業務改善	特殊健康診断の課題と展望	医局長 富永 晃一

## 研究発表の座長を務めた環保協職員

研究分野	座長
環境検査	環境生活センター技術管理者 三枝 晃次郎
問診の活用	渉外課課長 新里 篤志
特定保健指導	健康増進課課長 笠毛 郁江

### キーワード 健診と検診の違い

健診は健康診断のことで、健康であるか確認をするために「病気の危険因子」があるか否かを見していくものであり、特定の病気を発見していくものではありません。一方、検診は特定の病気を早期に発見し、早期に治療することを目的としています。